
Nagisa's Birthday SS (仮題)

如月奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Nagisa's Birthday SS (仮題)

【Nコード】

N0128Z

【作者名】

如月奏

【あらすじ】

来週末に控えたクリスマスイブ。岡崎朋也は娘の汐と共に妻の渚の誕生日を祝うサプライズパーティを開くことにしたのだが……。

十二月

風も冷たく感じるようになった十二月。俺はいつものように同僚の芳野さんと一緒に、イルミネーションが展開されている街の中を奔走していた。決して大規模とはいえない工事会社勤めであるから、仕事量も割と多い。しかし、俺は高校を卒業してこの仕事についてから、なんとかやり続けることができている。厳しく言われることも多かったし、失敗も多かった。挫けそうになることもあった。それでも頑張ることができたのは、大切な守るべき家族があったからだ。

来週末の二十四日は、世間一般ではクリスマスイブとか言われてもてはやされるのが常であるのだが、俺にとってはそれ以上に重要な日であった。そう、俺の妻である岡崎渚の誕生日。娘の汐と、一緒にパーティを開いて祝うことを約束しているのだ。

しかし、ただのパーティにするつもりはない。これは汐の発案だった。

「さぶらいずにする！」

汐の幼稚園の教員、藤林杏にでも何か言われたのだろうか。小さい子は大人の言葉を聞いて育つというからな。しかし、こういうのも悪くない……と俺も乗ったわけであるが……。

いざ考えてみると、いろいろサプライズにするには問題もあることに気付かされた。しかし、何よりも一番の問題となるのが、だんご大家族のぬいぐるみをプレゼントしてきた。だが、このぬいぐるみ、何と言ってももう生産中止されている代物である。おもちゃ屋に行つて

「だんご大家族ありますか？」

と聞いても、どこぞのみたらし団子屋のごとく数分で手渡ししてくれるようなことはまずないといって良いだろう。生憎様、もう既

に何軒もおもちゃ屋を回っているが、良い話は一度も聞けなかった。
「岡崎、どうかしたか？　心ここにあらずという感じだったぞ」

同僚の芳野さんが俺に聞いてきた。ちなみに芳野さんにも公子さんという妻がいて、その公子さんは渚の高校時代の美術の先生で、渚の母の早苗さんとも仲が良いという不思議なつながりがある。

「え……そ、そんなことないっすよ」

「む……そうか？」

芳野さんは訝しげに俺の方を見ていたが、ため息を一つついて立ち上がった。

「何かあったら言えよ。お前のしよげている顔を見ていて、一番悲しむのは誰だ？」

真剣な表情で言う芳野さん。

「え？」

「お前を愛する人……渚さんに決まっているだろう！　世界がどんなに崩壊しようとも、君だけは愛していたい……とそう思ったのなら、お前はそんな風にしよげているはいけないはずだ！」

握り拳を作りながら力説する芳野さん。

「……」

「全ての中で最も大切なもの……そう、それが愛だ」

芳野さんはかつては元ロックミュージシャンで、ラブソングなども多く歌っていた。だから、このように愛について語り出すと、とても熱い。

なお、余談であるが、引退後しばらくは、歌うこともしなくなっていたようだ。ある一件を機に仕事の昼休憩の間にギター演奏を同僚に聞かせてくれたりするようになっていた。俺もその演奏が好きだ。

「さて、仕事再開だ。年末が近いから仕事もやや多めだ。気合を入れていくぞ」

「は、はい！」

仕事が終わった頃には、空も暗くなってしまうていた。俺は芳野

さんの携帯電話を借りて渚に遅くすることを伝え、街のある場所に向かった。

おもちゃ屋にて

この近辺のおもちゃ屋で唯一訪れていなかった場所があったのだ。諸理由から、出来ればこの店にお世話になるのは嫌だったのだが、緊急事態ということだから仕方がない。

「SHIRAHO」という名の店だった。もう今日は閉店するつもりだろうか。暗いのに明かりさえ点いていなかったが、幸いにもシッターは閉まっていなかった。間に合ったようだ。

「はあ……」

前にここを訪ねた時は、酷い目に遭った。まずライトセイバーもどきで脳天を叩き割られた。それから、ベンガルオオトカゲのトカゲ君とかいうブツをオッサンのために用意していた。何ともまとまな店のようにとは思えないのだ。だから、本当に来なくなかったのだが。

「ちーっす」

店内に入るも、人影は見えない。本当にやっているのかと疑いたくなるぐらいだ。すると、その時である。店の奥に棒のような黄色の光が灯った。俺は咄嗟に身構える。

「はーっ、とうっ！」

ライトセイバーもどきから身を守るため、俺は頭の上に手をかざした。前と同じ手は通用しない。そう高をくくっていたのだが……。
「ぐおおっ！」

面ではなく胴だった。

「なんじゃ、前からちっとも進歩しとらんじゃないか」

やっと電気がついた。頭が輝いている爺さんがため息をつきながら、ライトセイバーもどきの剣先をしまう。

「俺はそんな遊び、やりたくもねえよ！」

「はっはっはっ、そうか」

高笑いする爺さん。やはり苦手な相手なのかもしれない。

「さて、何か御用かね？」

「あ……あの、探し物があるんですが」
俺は聞いた。

「天使の人形なら遙か北の地の森の近くに埋まっとるわい」

「なんでそうなる！」

退店してやるうかと本気で思ったが、一応聞いてみることにした。
「だんご……大家族の……ぬいぐるみです。どんなやつでもいいんですけど……もう生産中止になっているので、どこにもなくて」

「だんご大家族？ はっはっはっ、お前そんな趣味があるのかい。
いやあ、人は見かけによらないとは言うが……」

嫌らしい笑みを浮かべる爺さん。もう嫌だ、この店……。

「……まあ、うちにはないんだが……確かわしの知り合いの店には置いてあったような……いや、なかったような……」

どっちだよ。

「確認してもらえませんか？」

「なんでお前のためにそんなことせにやならん！ わしはお前の悪趣味に付き合うつもりなんかないわい！」

「んだとお！」

なんという人だ。俺は諦めて帰ろうと思いかけていたが、爺さんが俺の肩を掴んでじっと見つめていた。

「なんだ？」

「ただ、条件付きでなら確認してやらなくもない」

「条件？」

よく分からないが、一応爺さんなりの譲歩らしい。俺は傾聴することにした。

「明日、秋生君を連れてきてくれ。最近遊びに来てくれんで寂しくての……」

「は？」

意味不明だった。しかし、条件としては想像していた以上に軽いものであった。

「……最初から確認ぐらいはしてやる気じゃ。でも、それだけじゃつまらんからの」

なんという……。まあ、悪い人ではないということにしておいてやろう。

「頼む。わしの一生涯の願いじゃ」

ちっぽけな願いだった。小銭を求めるぐらいにちっぽけだった。

「分かったよ。明日だな。もしオッサンがダメって言ったら、どうする？」

「じゃあ、確認してやらな―い」

「おい」

意外と子供のような人であった。

「あ、あと、絶対にあるとは限らんかな……。期待し過ぎは禁物じゃぞ。変な人」

どこかで言われたような気がそこはかなくなる呼び名だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0128z/>

Nagisa's Birthday SS（仮題）

2011年11月30日20時46分発行